

ば馬車などの来るに逢へり
 電線は常に路傍にあり此は
 気仙沼に通じ後濱街道を北
 進するものなれば余等の指
 導者として最良のものなり
 丸飯を食ひて進み行けば峠
 にかかりたり東磐井本吉と
 の郡界、陸中と陸前との国
 界。岩手縣と宮城縣との縣
 界なる北上山脈なり其の名
 のわりには高かからねど新
 月の不動坂の景を賞し憩ひ
 て行けり競争的に急ぎたり
 小野・石川君先に付きたり余
 の後には川越君其他来れり
 背を見れば満面泥土を塗れ
 り村上傳助なる宿に着きて
 乾かしたり二時か三時頃な
 りしならん高田まで行かん
 とせしも舟なくて止めたり
 海岸へかもめ出でて入江を見
 る白鷗あり初めて知れりこ
 こは我が海なるものを見る
 始めなりき舟は帰帆、漁場の
 臭気皆始感す

二十一日 晴天

神社の所に登りて湾口を抱
 ける大嶋を見下りて綱引く
 漁夫を見はつらする魚虫を
 見水中を覗ひて海盤車の類
 を見、蟹、海老の大なるを賞
 し快禁なくてありしが割愛、
 此處(ここ)を去り行けば四
 天雲なく江波穏かなり塩田
 を見海水を舐ぶりて其の鹹
 (から)きを知りたり行く程
 に海を後にして山路に入る
 撃坂に通る掛かる峠と云ふ
 峠に逢へる始めにしてなかな
 か流汗をただならざりき、こ
 れを下りて里に出で又上り
 となりて松坂なりこは前よ
 り小峠なり頂上に至れば思
 はず絶叫したりけり高田湾
 眼下に洋々漫々(中略)長部
 なる村ありここより高田ま
 で小舟に乗らんと相談し漁
 翁を頼んで漁船に乗る富田
 先生と佐藤は泳ぎたり余等
 は渚に浅き所をたずねて海
 水浴の始をしたりけり又乗
 りて行く(中略)伊東屋(白
 岩屋)に入る足を洗ふて二階
 に上る裏二階なり間もなく
 丙二年生の村井一郎彼等二人
 も再度来りて食事を共にす

る食後に横田元秀君(盛中
 卒業生)村上万七君来り見
 ゆ暫時の後先生には斉藤と
 云ふ高等小学校の校長宅へ
 行けり同氏と共に帰り来り
 しが微薫を帯びて見うたり
 きを話をし「トランプ」を遊
 ぶ同氏持参の小判示された
 り目下百五十円價值ありと
 なん一分銀四、五枚をも見る
 又同氏より菓子をも一同に贈
 られぬ是れを賞品として再
 び「トランプ」を遊ぶ齊藤先
 生来り之に加はる二人ずつ
 組に墨付をする勝負となり
 中止せり明日水上登山(ひか
 みさん)と約束し一日逗留す
 る事となりぬ九時頃寝に付
 く明日は晴か?曇か?
 二十一日 晴天

朝六時に起床(…中略)

(※水上山に登り大海原を望
 む、金華山も見え東方には大
 船渡湾眼下に見え胎内くぐ
 りをする)

氷上三明神社を参拝し冷
 水を飲んで宿に帰る。(中略)
 岩井君方にて馳走になり後
 海水浴のため松原海岸に出
 る四人の人々皆集る貝拾ひ



▲吉浜啄木来遊100年記念碑

面白し(蟹も多く群り居て
 人の足音に驚き逃げまはる
 様面白かりきと記憶する石
 川啄木の歌に「東海の小島の
 磯の白砂にわれ泣きぬれて
 蟹とたわむる」は此の時の感
 想ならんと後世の人推測す
 るも理ありと余も亦同感な
 り(晚餐を上記の通り済ま

し散歩に出つる齊藤先生は
 富田先生と碁を打ち居られ
 たり四人の人々来り「トラン
 プ」遊びて帰り去る其後先
 生は麦酒贈られたり飲まぬ
 かと云ふ余も少し試みたる
 に苦くて美味ならず斯くて
 後寝に入る